

日銀支店長が語る

# 経済よもやま話

## 第22回 「大地の歴史」と「人間の歴史」

日本銀行仙台支店長 岡山 和裕



時代の流れによって見え方が変わる場所があると思うが、その典型例が「川」ではないか。というのも、今では人の移動や物の運搬は、自動車、鉄道、飛行機がほとんどだが、これらがなかった時代には物の運搬、特に重い物の運搬は「川」が主流だった。

そこで興味を持ったのが、山形県の最上川。富士川、球磨川と並んで「日本三大急流」の一つで、松尾芭蕉が「五月雨を あつめて早し 最上川」と詠んだことでも有名だ。少し調べてみると、長さ229kmは全国で7番目だが、1つの県だけを流れる川としては、最も長い川とのこと。また、山形県の35市町村のうち33市町村に流れており、流域面積7040km<sup>2</sup>は山形県土の76%を占めている。

こうしたことを知ると、探索したくなって、巡ることにした。

山形県にお住まいの方々にお伺いすると、皆さんそれぞれにお気に入りの最上川ベストビュースポットをお持ちらしい。その中でもご紹介いただいた大江町の「日本一公園」に行ってみた。高台から最上川を眺めると、眼下に雄大に蛇行している最上川、そしてその向こうには朝日連峰・蔵王の山々を眺めることができるのだ。しかも、行った日は晴れていたため、空の雲が蛇行している最上川の水面に映って、とても素晴らしい景色なのだ。思わず何枚も写真を撮ってしまった。そして、案内板を見ると「近くの工事関係者が通った時、『ここからの眺望はすごい。日本一だ!』と叫んだ」と、公園の名前の由来が書いてあった。

そうこうしていると、最上川の川下りがあることを教えてくれる人がいた。しかも2カ所あるらしい。両方とも行ったが、そのうちの一つの村山市の三難所舟下りについて。三難所とは、舟運において船頭が最も恐れていた3つの難所が続く場所、そこを舟下りしてくれるのだ。三難所の名は「碁点・三ヶ瀬・隼」。「碁点」は碁石を並べたように岩が突起しているところ。「三ヶ瀬」は川底に細い岩礁が三層をなしているところ。「隼」は岩礁が川底全体を覆い急流になっている

ところ。実際に行ってみると、ここを舟が通れるのだろうかと思うような場所だった。

でも、1時間ほどの船旅の間、船頭さんの面白いお話を聞いていると、色々なことが分かった。様々な物資を運ぶ必要があったので、山形藩主の最上義光はこの三難所を開削して最上川舟運を発展させたのだ。また、流れが激しいので、上りと下りの時間を決めていた場所もあったらしい。正しく経済活動の基盤である物の運搬を確保するために、先人達は多大な労力と工夫を重ねて、実現してきた訳だ。何ともたくましい経済活動を感じる。

ここで大きな疑問が湧いた。なぜ、最上川は1つの県だけを流れる川としては、最も長い川になったかということ。それは、最上川が山形県沿岸部と内陸部の間にある出羽山地を横切り、川の両岸が崖になっていて、山形県内を大きく蛇行しながら山間地を縫うように流れているからだと思うのだが、どうしてそうなったのか理由を知りたくなった。

色々調べてみると、疑問が氷解した。何と、最上川が流れ始めた時には出羽山地はなく、最上川ができた後に出羽山地が隆起してできたらしい。川が大地を侵食するスピードは、山地が隆起するスピードよりも速いため、川は同じところを流れたらしい。このため、最上川は出羽山地を横切る急流な川になったのか!

「大地の歴史」と「人間の歴史」の交わりを痛感した。

### 岡山 和裕氏 プロフィール

1969年(昭和44年)生まれ  
兵庫県出身。本店15部署のうち8部署を経験したオールラウンダー。東日本大震災では、金融機構局で被災金融機関との連携役を担ったほか、熊本地震では決済機構局業務継続企画課長として現場を指揮。前橋支店長、業務局参事役等を経て、仙台支店長に就任